

信毎俳壇

今井 聖選

線香花火ジュツ戦争は終はらない
(原村) 加藤津恵子
氷菓子なめ死神を遣さけん
(須坂市) 丸山 英子
単線の来て夕風に人降ろす
(埼玉県美里町) 川崎 彰典
立秋や練り餌を撒けば鮎群る
(佐久市) 西田 和彦
黒々と黒々と喜雨来る
(飯綱町) 坂井 寿男
年寄りにしがみつきたりあのこつち
(安曇野市) 丸山 進也
善光寺平は炎暑の大皿へ
(長野市) 武田 芳子
踏切を待つ間に増ゆる雲の峰
(箕輪町) 松沢 陸
帰省の子睫毛外して子に戻る
(佐久市) 真山 邦弘
馬の背の雷雨に見とれ手が止まる
(佐久市) 小林喜久男
佳作
いちまいの羽根の痛みや酷暑しみ
(坂城町) 宮下 和夫
コハシの釣銭の音夜の秋
(長野市) 神谷 伸一

選評

一句目、線香花火ならざる人間がジュツと溶けるのが原爆であり戦争。屈辱は悔しいが命はもっと大切。さあどうする。二句目、アイスクリームをなめているのは命を繋ぐためよといいいながらとてもおいしそう。三句目、単線と夕風。その二つの言葉に水彩画のような清冽な風景が浮かびあがる。四句目、練り餌に一齐に鮎が群がる。転じてどこかの国の政治家に似ていないか。

神野 紗希選

黒猫の爪の白さや夏の月
(長野市) 福沢 ナナ
湖に氷河の跡の涼しさよ
(長野市) 南郷 修二
新涼や埴輪の眼風通り
(箕輪町) 向山 政俊
二胡聴かばなほひと恋し晩夏かな
(上田市) 竹内 重美
膝頭そうへ扇風機の微風
(松本市) 伊藤 和夫
太陽の芯はガスなり秋の蝶
(小諸市) 加藤 陽介
木曾川の石ころと炎暑かな
(大桑村) 木戸口信幸
日焼子の瞳まつすく原爆忌
(佐久市) 佐藤 勝子
汗拭ふ夫の背にある手術痕
(茅野市) 五味みさほ
夏動手を舐めに来る牧の牛
(上田市) 斎藤 俊樹
佳作
みどりの夜死の通期思ひをり
(長野市) 八重田 修
この孫を見やりし妻の魂迎
(長野市) 坂口 智弘

選評

一句目、黒猫なのに爪は白いという発見が楽しい。月の涼しさにきらりと爪を光らせて。二句目、イギリス湖水地方を旅して詠んだそう。広大な氷河の跡が遙かな時空を物語る。三句目、埴輪のがら

坊城 俊樹選

バンドネオン晩夏の恋に吸り泣く
(東御市) 渡辺美保子
出棺を待つ片膝に身を寄せて
(佐久市) 西田 和彦
「待っていた」駅の黒板夏の果
(辰野町) 矢島あさ子
足跡の深き花畑夕焼空
(千曲市) 滝沢 武子
日焼せし応援団の凱旋す
(箕輪町) 向山 政俊
ブラウスの中に秋風ふくらんで
(長野市) 菅野 早苗
風鈴や鳴れば景色の透き通る
(佐久市) 町田ゆかり
江戸文字のうの字うめく饅かな
(長野市) 荻原 宏祐
電柱の影に身を寄す炎天下
(長野市) 飯森 泉
風死せり読めない洋書捨てられず
(下諏訪町) 中村 久
佳作
豆腐屋の釣銭籠や夏盛り
(飯山市) 田中 琢雄
軒つばめ濁いた口をあけて待つ
(飯山市) 伊東 宣和

選評

一句目、「バンドネオン」とはアルゼンチンタンゴなどで使う楽器。その哀愁の音色は夏の恋にすすり泣くように奏でられる。その恋の終わりを暗示して。二句目、身近な人か思いの深い人の出棺か。片膝にへたり込むような感情が読者にも本当に切なく伝わる。三句目、伝言板のことか。もう夏が終わる頃、そこに書かれた失恋の言葉。あまりに切なくて、あまりに季節が効き過ぎる。